WEB 公開用｜財務研修資料サンプル

数字を、
経営と従業員の
共通言語に

損益計算書・工事原価・損益分岐点・労働分配率を
財務初心者にも分かる言葉で解説します

和田経営相談事務所

架空企業
設備工事会社 A 社

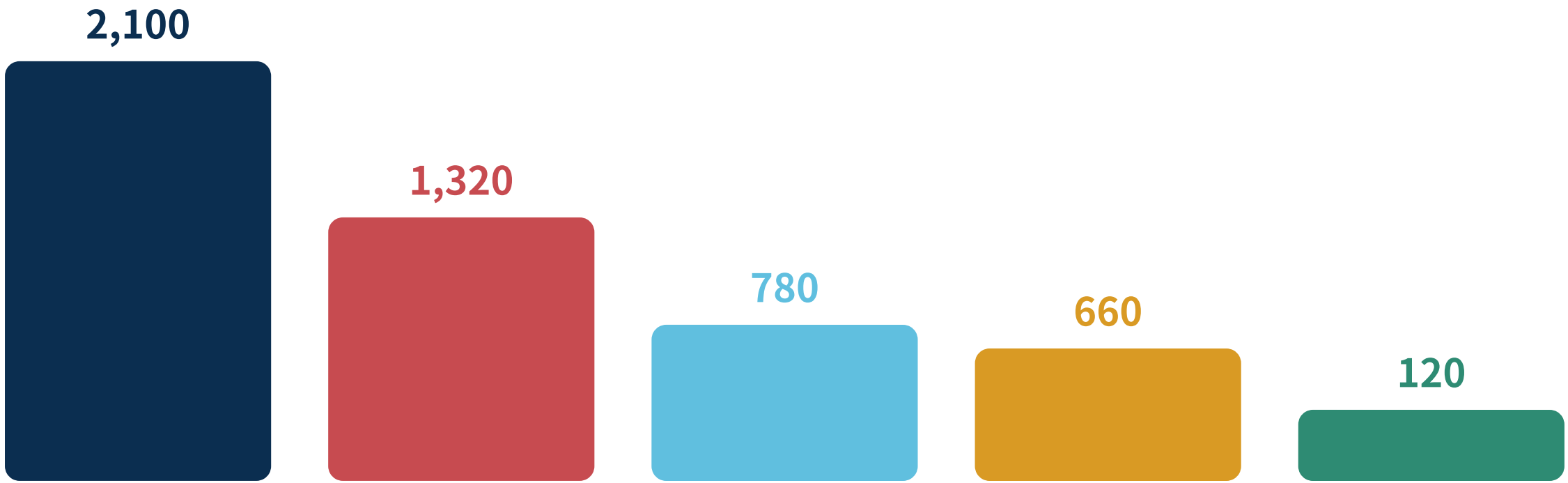
現場 → 原価

利益と持続可能な賃金

※従業員 100 名の完全架空モデル

損益計算書（ P/L ）

売上高 2,100 百万円から、本業の利益 120 百万円が残る



まず見る順番：案件の粗利益 → 会社全体の営業利益

工事原価

内製型の A 社では、工事労務費が原価の 45.5% を占める

完成工事原価 1,320 百万円



▸ 労務費に含むもの

工事従事者の給与・賞与＋社会保険の会社負担＋労働保険等

▸ 工事経費に含むもの

リース料・燃料費・水道光熱費・旅費・減価償却費・修繕費等

工数・再施工・外注の使い分けが、粗利益を動かします

同業者比較

平均との違いから、 A 社が“内製型”であることを読み取る

指標	架空 A 社	同業者平均	差
従業者 1 人当たり売上高	**21,000 千円**	20,876 千円	**+124 千円**
完成工事高総利益率	**37.1%**	43.7%	**-6.6pt**
売上高営業利益率	**5.7%**	4.3%	**+1.4pt**
外注費対完成工事高比率	**15.7%**	31.4%	**-15.7pt**
人件費対売上高比率	**41.9%**	29.3%	**+12.6pt**

平均は優劣の判定ではなく、事業構造と差が生じた理由を考える材料です

出典：日本政策金融公庫『小企業の経営指標調査』（ 2025 年 8 月調査）／機械器具設置工事業／黒字かつ自己資本プラス企業 61 社平均

損益分岐点

売上高が 1,900 百万円を下回ると、本業の利益が赤字になる

損益分岐点 ＝ 売上高と費用が同額になり、営業利益が 0 円になる売上高

固定費 1,140 ÷ 限界利益率 60.0% ＝ 1,900 百万円

実際売上高 2,100 百万円



変動費：売上の増減に応じて変わる費用（材料費・外注費など）

固定費：売上が変わっても短期的には大きく変わらない費用（人件費・減価償却費など）

※この例は営業利益ベース。借入金利息は営業外費用のため計算に含めません

付加価値と労働分配率

会社が生み出した付加価値 1,200 百万円を、どう分けるかを見る

売上高 2,100 − 外部購入費 900 ＝ 付加価値 1,200 百万円

外部購入費＝材料・外注・リース・電力など、社外から購入した物やサービスへの支払い

人件費 880 百万円
労働分配率 73.3%

残り 320 百万円
26.7%

人件費＝給与・賞与＋社会保険の会社負担＋労働保険等

残りは、減価償却費・支払利息・税金・利益・内部留保などへ配分

労働分配率は「高い・低い」だけで判断せず、付加価値の大きさと持続的な賃上げ余力をセットで考えます